

第1回苗穂連町災害時要援護者避難支援

防災訓練の結果について

☆1 訓練結果の確認

- ・ 参加団体：11 単町（災害時要援護者避難支援活動導入 4 単町含む）
- ・ 避難者数：79 名（要援護者：16 名、自立避難者：63 名）
- ・ 従事者数：102 名
- ・ 使用飲食料：パン 96 個、クラッカー96 個、水 49 本

☆2 当日反省会での意見

- ・ 地震発生の一斉発表があった方が良かった。
- ・ 担架による搬送は男女混合 4 人では難しい。
- ・ 情報連絡の際に同じ様式への複写は二度手間不要。
- ・ 参加人数の把握方法が難しく、備蓄飲食料の搬入数量の伝達に遅れが発生。

☆3 当日反省会での総評

東区市民部総務企画課

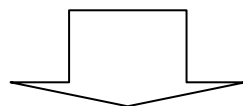
- ・ 要援護者に対する訓練は東区では初めてである。
- ・ 自助に引き続き、倒壊家屋から要援護者をどう地域で助け出すのが難しい。

消防局東消防署警防課

- ・ 自主対策本部が本格的に必要なのは収容施設であり、どう立ち上げるかが難しい。
- ・ 冬に災害が起きた時にはさらに難しい対応を迫られる。
- ・ そのようなレベルアップした訓練も今後必要であるが、相談してほしい。

東区保健福祉部保健福祉課

- ・ 東区でも災害時要援護者避難支援への取組みを始めた。
- ・ 保健施設への避難者収容に関するルール・マニュアルづくりを進める。



☆4 事後アンケート調査の結果

(1) 事前勉強会

- ・ 勉強会前の役員会による確認会議が非常に有効だった。
- ・ 役員会と勉強会の時期を早めに行えば、スケジュール的に余裕が生まれたはず。
- ・ 消防署による実技訓練は良かった。
- ・ 資料が複雑でわかりづらかったので、摸擬的にやってみても良かったのでは。
- ・ 一連の流れで各部・班が摸擬的にやって、さらに確認打合せをやるべき。
- ・ 部と班と一緒にまとまって話を聞けるようにした方が良かった。
- ・ 講演やDVD等の実例学習を多く取入れ、防災・共助意識の向上を図るべき。
- ・ 要援護者の支援活動や日常の見守り等の共助意識の醸成向上を図るべき。
- ・ 勉強会は訓練前に限らず、定期的に回数を重ね、レベルアップするとよい。
- ・ 事前に細かな連絡網を整備しておく必要がある。

(2) 当日訓練

○全体

- ・ 部長と班長の連携がもう少し取れていた方が良かった。
- ・ 班長同士による全体の流れの確認打合せがあった方が良かった。
- ・ 従事者が役割を重複させることは望ましくない。
- ・ 支援者が従事者を兼ねるのは避けた方が良い。
- ・ 各部・班の出動時間帯をさらに細かく決めておいた方が良い。
- ・ 各部・班の人員配置バランスを、実践を通じて適正に見直すべき。
- ・ 各自の役割が十分理解されていない部分があり、十分機能しなかったところがある。
- ・ 避難者も安心するので、進行状況等を適宜マイクで報告伝達する方が良かった。
- ・ もっと若い世代も参加してほしい。
- ・ 今後の高齢者増を考えると、多くの地域住民との連携を密にしていくことが大切。
- ・ 水害を想定した訓練も必要。

○総務部

- ・ 総務班として、各部の全体の流れの把握が不十分だった。
- ・ 受付が非常に混んでいたのも、人数増、テーブル間隔を空ける、町内会表示を高く掲げるなどのほか、シンプルな受付方法にするなどの工夫が必要。
- ・ 情報連絡班の架空被害情報の聞取りや受付状況連絡の方法が難しく非効率だった。

○避難誘導部

- ・ 要援護者支援班として、もっと若い人の参加が望ましい。
- ・ 具合の悪い人が訓練時間中、待たされ続けるのは厳しい。
- ・ 交通整理班として、配置現場での他部との情報共有が必要。

○給食給水部

- ・ 備蓄飲食料班と炊き出し班に分けず、臨機応変に対応できるようにした方がよい。
- ・ 配布場所に大きな看板が必要。
- ・ 子どもには味なしパンの方が良いとの意見あり。
- ・ 皿は必要なし。水分の追加補給も可能だった。

☆5 総括

- (1) 十分な準備期間をとって、模擬的な試行を重ねるなど、各自の役割や各部・班の連携が十分に理解されるような勉強会にする。
- (2) わかりやすい資料とシンプルな手法にして、誰もが動きやすいようにする。
- (3) 可能な限り支援者と従事者を重複させない体制づくりを目指す。
- (4) ただ流れで行うのではなく、地震発生から各訓練の進行状況などの情報を共有できるようにする。
- (5) 訓練を単発で終わらせず継続することで、地域全体の防災・共助意識の向上を図るとともに、少しずつより実践型のものにする。

※ 防災・共助意識の向上のための参加型訓練（お膳立て・予定行動型）：

事前に役割やスケジュールなど全てお膳立てし、予定どおりに行う。

※ 現実に災害が起きても対応できる実践型訓練（突発的・臨機応変型）：

突発的な状況でも対応できるよう、より現実的な人員・役割で、状況に応じて行う。

- (6) 訓練のためだけではなく、普段から万が一のための体制づくり（連絡網など）と、若い世代や多くの地域住民に参加してもらえるよう、要援護者の支援活動や日常の見守り等の共助意識の醸成向上を図る取組みをする。